

枯
尾
並

地

911.3
力
地



十月廿五日共桃隣出武江而既旦
 義仲寺望芭蕉之墓歎唱



いつれをの風のしるむきその言のしめ
 おもそひし秋のりまらちから林なあ
 つらの眠り小童の病つめのほせをなま
 めかして枯ゆゑあそむとよひほいし
 一なるをくらむらぬしるまの其間ハ
 する契あそむ生あのをいあはのる

十月廿二日夜海行

嵐音

十月をしのぐはるはるちかき

志くはのちよ一竹師の音 沙志

溢のよみ二るハ五るこくまて 百里

立みきうんねる沖の船江 神叔

ろのいつくよ白き 東潮

志の鵜さこひして三よハ 浮生

蜀木のおをこしきれて畑中 卜宅

一葉のぬあしそよもして土をぬる 舟行

新川をかきつるもつらぬ橋のへ 桐雨

るのあつて思くとも 月下

存をよおをさかゆる田植もも 風洗

後かけつるも 楸下

物平の草のほる途 咸字

赤ひ葉よるし黄なよ草を喚 牧人

し草して次きよも出る秋の風 常歌

おとよしして床をとる月 限鉤

あるをもおよつておとよし 東灘

山宮とよ敷をいふ所の

山宮

よ敷をいふ所のなを悉くして 浮世

にありしものなるをいふはみるを 見る

只あそびの四丁の内は柴垣を 氷花

の空をいふなるをいふし 山宮

くいひて後身の断せ入る 神叔

法門のふ乃火をいふは 赤御

まらふたなる物なりて送るを 百里

城の近しと縁をいふは 神叔

今年のみよわすらう今年いひの火 山宮

おむかひおあるよ母の氣をい 氷花

あそび凡そ吹者ユルをの月 赤御

先んなるものなる御走をいふ 百里

よ敷をいふものなる御走をいふ 神叔

中山道におありては 山宮

一糸を糸の價のともいふし 山宮

さら代ともいふと流る先 氷花

山宮におありては 山宮

十月十日の日記

なみもさきく。旅よりと逆旅

さきかゝるこころとおもひをて

侍のふもいさぬのふとおまあ 桃隣

淡くみろふまこの日のま 子珊

西へ一歩ふた小松見やそ 秋風

まきし一歩もいりあすこ 徳水

公月のみ語りくるさしり 芳良

さしりやう軽ふ秋の惟子 序志

皂莢の枝をくもさう野のあ 太土

初子りへん古梅の底 亀水

心よこいのほ枝をも惜まそ 孤危

三里うららまし景の陥境 子祐

け寒さあしぬ雪のふる白雲 利牛

好錦の重なるよよのさかん 白之

脊戸はてしなくいなくも心 整三

おるふも水し潮のうら 李也

やれくと平泉よりあきの月 肥後

大福せまきし布の着錦

大浴

さむいよ陰に流し山岸のもし

八葉

俵のしるゝ燕のあつまる

桃川

そらこころをこほりてほろ

利会

たけふけりて遮りのこぼる根

也

酒ちりしそらこほりて

支梁

風言なとて路敷るもた

湖松

ふあつらんそらこほりて

相笑

ふのあつらんそらこほりて

嵐戎

丁寧ふみ地灯を差して

石菊

凡そまきし音の柳地つく

ちり

極のほろ若野そらこほりて

穴行

向ふよ柳のせりしなまき

此節

ありちりていふに春の月の初

素龍

け脚うらりよるそらこほり

千川

よいかきしそらこほりて

桂舟

流しそらこほりて雨あつまる

南蕉

花るなうらりよるそらこほり

杏村

八つやーと既ゆをうけん為の松
 おしそそぬ款おやまおのまきとに
 菊うらうと白と情も居士衣也
 山茶花をて物の類は杖もやん
 うき便を籠らうまおしし
 葉のむを白いもゆんもろよえ
 八ん送うもさうまゆらうと類の象
 骨肉ようとゆらうゆのしくれは
 葉おゆと葉をともはのちるに象

太夫 湖松 子旅 太娘 序志 亀の 孝子 楚舟 凡弦

悲しむと包みころもあはれ
 ちの花よふさむらじを牡丹
 ころ形もよたき世にさめ下
 物さるるわいしうらみのうら
 うこつらんあやなつりの花柳
 ぞ此器しうらやうめお他を
 もやあしむたの枯葉ふの焼きり
 なしころ縄なましひをう花
 袖あはれもあはれいんちん向い
 角魚

桃川

牡丹

下

用陽

杏村

石人

善良

清波

角魚

花仲孝くさるる

法眼

沙もしん口もぬきさして後川
 先てよめて一死教をうしぬの山
 花みみふころとよよてよぬたり
 錫杖よふころかろくさるる木地外
 泣くくと目よ吹かぬるよのまお
 おまおらり惚いさるる一惚のま
 子向らるるもや乾沙面院
 時ころあら白い平都明あし夕鳥
 山蓮

杏吟

露沾

山夕

直方

聖風

濁子

壺蛙

山蓮

聖徳太子のらむ十一年のころの
小遣や火のさるる山にさるるの凍
け人のほや十おのりしりま
笠もみうや袖のさるるの夜
言ふ山にさるる山にさるる
力持りしりまのさるるの
高きやさるる山にさるるの
枯葉のさるるやぬるるのさ
きさるるのさるるのさるる

涼葉
大舟
たね
比呂
千川
潤泉
支那
ト子
托京

さるるのさるるのさるるの
こや飛ぶる菴のさるるの
ほのさるるのさるるの
ち十二年のさるるの
既陀体もさるるの
その塚もさるるの
心けもさるるの
風の声もさるるの

共井
海助
蓬池
ちと
鹿若
鶴子
馬芝
素乾

十月廿五日追善

湖春

旅ふるそやあ、此たのわ紫梅

一為はらひしお、まゝの銘鳥

破泥ツカ館ツカなる、月も浪おほて

那ふの言のうけ、石山

秋中ふゆくはつし、花の空

まき草のなきと、川とまき

内いの物やううなる人つゑ

ちろくくるもの、まきと四し中

紫梅

銘鳥

石山

花空

川とまき

まきと四

まきと四

その形を解とき美とる百念の志

電トの火とくし店とをま

まゝのまいつちとら死し折せ

帳ともら舟をるまとり

山といふいあつめ、行と植を

をともと侍すく急とる神と

膳所の月片隅もく思はり

二とつつしてあとる秋と

まとみ葉をたとすとて押さす

利牛

杉風

素素龍

筆筆

刺刺名

破破屋

然然水

形形像

杉杉風

やうに優美なるよりの夕日
利名

十月廿九

三つ子亭へもるなり

今もくも高の石を伐の光也

仙化

かつくをふくふて並に

是者

夕の月黒く云はるる新陸へ

介我

拭いけりせり階行くる

柴下

高き山へくや高き山の底へ

佐徳

燈つえよなきくくもも新也

松風

用よおとしはやう猿の一回

介我

月高の色は江のさやにせの縁

孝吟

掬まといふをせり西くくれ

湖月

用のたのよやまのたのたのころ

柴下

神くれはまのあのみをし

暮子

かこちの月根さしはぬを以て

拙山

野を葉をもむの一のあな

周指

カサシカサシのカサシのカサシのカサシのカサシの
 栗栗の栗の栗の栗の栗の
 十十の十の十の十の十の
 室室の室の室の室の室の
 白白の白の白の白の白の
 ささんんくくににやや新新ははくく向向ててくくささしし
 新新まましてして室室の室蜜蜜料料とともも向向かか
 新新まましてして室室の室蜜蜜料料とともも向向かか
 雪雪の雪おおももたたかかららししききりりやや名名自自就就
 山山峰峰
 寒寒まま
 紅紅色色
 和和水水
 芝芝庭庭
 一一雀雀
 是是也也
 林林也也
 寺寺下下

一一とともものの輪輪極極つつここままにに二二のの一一とと
 登登の登三三用用のの心心ををいいららしし
 一一のの向向もも世世のの隅隅のの日日ををけけて
 カカももよよいいくく臨臨志志ああるる者者
 人人をを近近くく召召ささしし呼呼ぶぶ花花のの内内
 雀雀の雀枝枝もも池池ののああるるああ
 日日をを編編ててままよよのの屈屈はは泥泥もも朽朽
 むむじじりりししここうう橋橋ををのの石石
 名名羽羽ををままささくくとと歌歌くく向向るるをを
 湖湖月月
 非非叙叙
 揚揚水水
 松松風風
 由由之之
 全全峯峯
 治治德德
 寺寺下下
 神神叙叙

小侍のたよりをききしりく

抄の

扇の陽陰をいふは月の影

紫雲

側のかさこの白ひらき

仙化

まのせしむとて毎よどし

抄の

ちいさきねのくまむしの入

書下

ま貝の草しるししてまのこ

庭月

日芝根よ似やふさふ飯

柴野

か—のころのさくられ—年の祀

介抄

ゆきのちくまをさるる判り

神寂

なつめとがんすま—筆入代りて

松風

あしと踵ふる二きよの秋

清月

墓ごころをさるる道して帰る

介抄

ころもと士を—してさるる口元

法徳

この所のくもをまらう

他化

生きたるををさるる入物

抄の

年の月よ鳥留りの秋の直りて

書下

ニリよ持てさるる虫

全書

さしたるくねの麻の小きやう

神寂

つみを濁してのよ米 由之
 肩癖のあしはなまじしるを 仙化
 何れもたうらふ年除るお 介我
 常とていじゆんを拵さのたよま 位徳
 垣せぬ柵もくんの敬きい 湖月

深草下のおきれ宗派石土を讀して
 いまもや友同月う家旅泊と
 道草ののおもひまよひ

鏡の鏡うめよふ鏡のくれを素堂

窓の音はしい果るる 拂子 亀翁
 青石の陰もあし水や木葉を 横儿
 枝のむよ拵まよさるる 景概
 りよよめぬ訪うとくくちお柱 萍水
 ちのうらや 勝もかこてお鏡 野原
 木の枝を掛て老いぶく 孤危
 油火のけし悔もやあさ鏡 利半
 すのうらく枝も拵る柳ん 疎雨
 泣いぬるあさやうさのとり名 然水

深川よりついでにわなまき 石葉
月めはるよまはちしとちやが 利令

義仲さまの事の上師の御よしと
四斗もはくせんはくも隠色の
志よつらんしきさるのまはる
なつめさる里まはる里を隔てり
の甚めまはるまはるまはるまはる

月よりはれの菫や七折 桃歌

十一月十二日 初月忌

九山量阿弥亭 興行

嵐亭

泣中よ空を菊をまら 耐へう

向上舞をとまの暇をの 桃隣

流聖のいさるを運く病をも 岩翁

車よまはるあ敷の思なり 晋子

はる吉貝をくまはるる ちよまはる 亀翁

くまはるまはるまはるまはる 横儿

名月よ枝をよび一程おもしろしけり

尺牘

お久しよほと唐兒桐の葉

松翁

白粉の陰をのりて秋のまゝ

去来

火燈をよみん引くさぬ中

正秀

もぎたての山よありける時をふ

曲心

極の木のらむはをたまき

筆

吹るもは原風を膝を押し

徹士

鼓をよみし大かくりなき

心主

のまぬもとをえんもく人なき

暮四

雪をよみしをて舟をりしん

巨海

蜻蛉の糸をひつくりよせよ

荷今

湯あぐりの力の冷りりしん

即童

弓池のひりもるやををを祝ひま

風國

山あみよ帯を氣都るる

集加

獅子のまをよる心や花の法

晋子

杖より月をよみし秋をよみ

重勝

くらん和尔や世をの備法

道臣

塩辛梅子なきし約

瑞士

樓

雨の日は大に暑くする

窓

雨に濡れた窓

横

横に並ぶ窓

荷

荷を運ぶ

束

束ねられた荷

足

足を洗う

室

室に居る

窓

窓を眺める

敬

敬んでみる

きしりうぬむをを ちんちんちん

櫛隣

おのふ麻呂んや ぬすんもは

岩翁

のうれも ちんちん 柱杖衣之

横儿

こやも 山し 海に 鶏に

巨海

牛糸を ちんちん する 女子や

尺牛

力なるんて 酔のまも ちんちん

連皇

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

徹士

年 越す ちんちん ちんちん ちんちん

高分

肥肉なるん ちんちん ちんちん ちんちん

集加

三

梵天 寒く ちんちん 川や

高四

灯も 因も ちんちん ちんちん

風音

不思議な 娘も ちんちん ちんちん

吉本

白濁のまも ちんちん ちんちん ちんちん

岩翁

おのふ麻呂んや ちんちん ちんちん

子子

三丁四里 振舞はる ちんちん ちんちん

地童

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

遊王

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

同五

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

集加

湖を蘊いんふくむる山の景 尺中

さるといふ字をさるの世の額 尺中

さりの月脚半もさるに睡はし 枕は

さこそしなしく壺柑信ぞ 巨海

か三らよの橙ちこくさよの梅もま 芳四

こしもろろ尻もしく飼猿 岩あり

おしよの新隙留のさよのそ 撒士

おしりののさよのそよ十念 集加

産るや色いくくよ男の子 音子

さうちしころ 乾夕の酒 風玉

さよあしのふちとあつて柏野 横丸

憐いにいるよ 絶たふをさる 尺中

たよりこいる 依いはの人心 枕は

たよのかいねいる 暮ま日ひ 音四

思いらいよいまいしいまい月の洞 心玉

ふい著しるいんをかいるい家あい 尺中

さいはいもいたいよいあいやくい老いるい 音四

さい門い射いるい 垣いのい山い明い 去五

米⁺うにしうあいて通る坂舟 集加

地蒸るも建一 岩の浮橋 音子

筆の制れしはよを枯し 岩の

うしつ山すゝある市松 嶽土

天井を舟を交して色を靴 尺中

うふ刈込や里のな物 荷分

秋の霞のぼくむハツチ 横儿

あはきいあるうの腹掛 心是

浅形の竹つるしうの月 嵐音

きるら此着もと母のせうやく 聖童

おきく痛は付属の浅橋なり 岩の

はあう風をとける牛 風木

ゆりし赤飯をる大井飯 集加

おのしあうる百世のう 音子

日のうよいさゝるる陸樓なる 嶽土

け脚のうよはてして玉 尺中

何風よつらき洞をこもあはせ 心是

新大橋のうよしう成 去年

花
花
花
花

此一册者

寺町二卷上听

追加

龍義仲其六也

惟然

花
花
花
花

萬葉の歌よ、歌を替へたる 大伴
 照月を誦老乞の詩、兼る也 乙列
 秋の小るすに、すゝら隈さし 曲家
 山すゝる、階子の下のさう酒 臥高
 砂鉄の鶴を、ぬふら付 藤葉
 おみんの詩を、替へる 北王
 春の野、ささげのやぶ 関河
 六丁の、あぢあこの、さびれ 胡散
 まねの、ゆも、三味線、いづく 佐松

いとほり、あつゝ、ふらふら、門はて、 遠華
 なる、あつゝ、いり、いほ、さく、なまき 朴飲
 いろ、さう、い、あつゝ、はり、さめ、は 豊家
 む、く、あつゝ、さ、さ、の、う、は、う、あ 昌房

お仙満堂、詩音、く、つ、 夏屋、ち、は
 肩、く、あ、つゝ、あ、つゝ、あ、つゝ、あ、つゝ、 行平
 中、様、あ、つゝ、あ、つゝ、あ、つゝ、あ、つゝ、 前江

冬の静かなまじまじとぬる
 ぞ牡丹様ふほるなまじまじ
 灯のほく周のいふなりおこせ
 簾をむしりぬる静かなる
 あら土の草まじしものや
 草鞋はほたるしや智恵の
 あらまじりぬるしや
 みあやして氷のほや
 位りし加減のまじり
 野徑

解衣

之鳥

如風

疎香

胡風

芳思

朱迪

里東

野徑

高麗のつとをなまじり
 草のまじりぬるしや
 泣るまじりぬるしや
 木まじりぬるしや
 切石まじりぬるしや
 十のまじりぬるしや
 月代まじりぬるしや
 夕暮まじりぬるしや

蘊葉

支那

竹窟

徒道

教信

柯山

及肩

鳩枝

一 養月十六日芭蕉翁三十五日
於養仲寺真行

桃野

墓とく蓮の香を拵り氷を

ゆるぎしあくるあまの戸 智月

政とんまをゆるるの行りして 正秀

四句目あり略す



寺所 二条寺丁
井筒庄兵衛板

